

平成 28 年度東北大学附属図書館
外部評価委員会報告書

平成 29 年 3 月

はじめに

東北大学は、平成 23 年 3 月の東日本大震災を乗り越えた平成 26 年 5 月に、東北大学グローバルビジョンを公表し、「ワールドクラスへの飛躍」と「復興・新生の先導」を目標に掲げて、活動を続けてまいりました。附属図書館もそのビジョンの下で、各種活動を展開してきたところですが、今後の活動の一層の進展に資するために、外部評価を実施すべく準備を進めてまいりました。

東日本大震災からの復旧がほぼ完了した平成 24 年度に、自己点検・評価のためのアンケート調査を実施しましたが、その後図書館本館の大規模な改修工事を実施することとなり、自己点検・評価活動を一旦休止せざるを得ませんでした。そこで平成 26 年 10 月の本館リニューアルオープンをまって、平成 27 年度に再度アンケートを実施した上で、平成 28 年 9 月に「東北大学附属図書館自己点検・評価報告書」を完成させました。外部評価の基礎資料となるこの自己点検・評価報告書の概要については、本報告書の巻末に収録しています。

今回の外部評価では、5 名の有識者の方々に委員をお願いし、自己点検・評価報告書などの各種資料および各キャンパス図書館の現地視察に基づき、外部評価委員会での議論および評価を行っていただきました。

本報告書に収録したのは、委員会開催後に各委員から提出していただいた評価書および委員長からの総評であり、各委員の知見に基づいた貴重な問題提起やご提言を頂戴することができたと考えています。私たちは本報告書の内容を真摯に受け止め、今後の活動の改革・改善に向けて役立ててまいりたいと思います。

最後に、ご多忙中にもかかわらず、快くお引き受けいただいた外部評価委員の皆様、あらためて厚く感謝する次第です。

平成 29 年 3 月

東北大学附属図書館長 植 木 俊 哉

目 次

1. 外部評価委員会	
1.1 名簿	1
1.2 開催次第	3
2. 評価・提言	
2.1 総評	5
2.2 外部評価書	7
3. 参考資料：自己点検・評価報告書	
3.1 自己点検・評価. 総括編	28
3.2 「自己点検・評価報告書」に関する補足説明	42

1. 外部評価委員会

1.1 名簿

氏名	所属等
(委員長) 引原 隆 士	京都大学図書館機構長・図書館長
江 川 和 子	筑波大学附属図書館学術情報部長
市 古 みどり	慶應義塾大学三田メディアセンター事務長
呑 海 沙 織	筑波大学図書館情報メディア系・知的コミュニティ基盤研究センター教授
岡 本 真	アカデミック・リソース・ガイド株式会社代表

1.2 開催次第

日 時：平成29年1月26日（木）

場 所：東北大学附属図書館大会議室

日 程：

- | | |
|-------|---|
| 9：30 | 外部評価委員会開会 |
| 10：00 | 移動（20分） |
| 10：20 | 医学分館視察（30分） |
| 10：50 | 移動（20分） |
| 11：10 | 北青葉山分館視察（30分） |
| 11：40 | 移動（5分） |
| 11：45 | 工学分館視察（30分） |
| 12：15 | 移動（5分） |
| 12：20 | 青葉山commons視察（30分） |
| 12：50 | 移動（5分） |
| 12：55 | 本館着 昼食・休憩（50分） |
| 13：45 | 本館視察（30分） |
| 14：15 | 図書館長挨拶、委員自己紹介、
外部評価委員会、まとめ[委員のみ]（休憩を入れて135分） |
| 16：30 | 閉 会 |

※岡本委員は Skype 参加

○配付資料

1. 外部評価書（様式）
2. 東北大学附属図書館自己点検・評価報告書
3. 東北大学附属図書館概要
4. 利用案内（本館、医学分館、北青葉山分館、工学分館、農学分館）
5. リニューアル図書館からの報告 東北大学附属図書館（『東北地区大学図書館協議会誌』第66号抜粋）
6. 図書館報 KIBOKO Vol. 41(1)～(3)
7. 東北大学附属図書館調査研究室年報 第3号
8. 東北大学附属図書館所蔵コレクション

2. 評価・提言

2.1 総評

東北大学附属図書館は、東北大学が開学以来踏襲して来た「研究第一主義」の伝統、「門戸開放」の理念、そして「実学尊重」の精神に基づき、教育・研究を学術基盤より支援する学内部局として、キャンパス毎の独自性を許容しつつ発展し、我が国の学術を支えてきた大学図書館として位置づけられる。

その歴史の中で、平成 23 年に発生した東日本大震災の影響は、附属図書館の運営自体の大きな転機になったことが、容易に理解できる。この復興の時期は、我が国の大学図書館にとっても、学術情報流通のありかた、教育への貢献のありかたが大きく変わり、各大学が模索を繰り返した時期と重なる。そのことから、平成 28 年度に実施したこの外部評価は、これまでの東北大学附属図書館の様々な試みを振り返り、大学図書館の将来像をあらためて検討する機会になるものといえる。

一方で、東北大学附属図書館が我が国の一地方の大学のあり方を示すだけでなく、全国に先鋭的なモデルを提供するに足る規模と内容を兼ね備えながら、必ずしも十分な活動に至っているとは言い難い。それらの点を外部評価委員の評価からも読み取ることができる。委員の諫言は、東北大学附属図書館の一層の活動の展開と、我が国の大学図書館をリードしていくエネルギーな活動を期待することによるものであり、非常に貴重な意見とすることができる。その意味で、外部評価委員の個別の指摘事項はこの総評だけでなく、立場の違う観点からの重要な指摘となっている。

外部評価の視点となる施設・設備、資料収集・保存、サービス機能、社会貢献、国際化対応、組織・運営等の論点は、我が国の国立大学共通の課題となっている。その意味で、他と比較して特別に課題となる点があるわけではない。むしろ全体の取り組みはバランスの取れたものと評価できる。しかし、相対比較ではなく絶対的尺度から見た中では、いくつかの課題が見え隠れしている。今回の外部評価において、委員からその点が指摘をされている。以下それらのいくつかを指摘する。

まず、新たに建設された青葉山コモンズは、昨今国の財政状況で難しくなっている大学図書館の新営がなった貴重なケースである。このコモンズにより東北大学の図書館が活性化する姿をぜひ見せてほしい。現状では部局の図書館としての位置づけであるが、この図書館を起点に全学の図書館を活性化させ、分館毎に温度差が見られる図書館機能を統一、融合させていくことが期待される。

次に、東北大学附属図書館は多くの優秀なスタッフを擁している。しかしながら、現在は意欲ある職員が自由奔放に伸びているような印象を受ける。意欲のある職員だけではなく、組織として人材育成をプログラム化・システム化することが必要であろう。どの組織においても、機能やサービスが属人的となると人が育たなくなる。大学図書館の大きな資源は人でもある。その人材を活かし、東北地区・全国（東日本）の中で育成して行くという観点を持ってシステム化を図ってほしい。

学習支援は、図書館本館を中心に熱心に取り組んでいる様子が見られ、高く評価できる。一方で、分館においてはトーンが低い。教育支援から研究支援への方向性について、東北大学がモデルとして示していただくよう希望したい。

今回外部評価のベースとなったデータに利用者調査がある。まとめられた自己点検・評価におけるアンケート調査においては、質的調査が若干弱いように見受けられる。エビデンス調査など様々な手法があるが、変化に対しては数値による量的調査だけでなく、モニターへの聞き取り調査などによる質的調査も加えていくことが重要であろう。それらについては、次の評価時期を待たず、定期的に行っていくことが、支援・サービスを陳腐化させないための重要なデータになるであろう。

震災で多くの建物が被害を受けたなかで、各分館は研究支援継続の重要な要であったと伺える。その中で今後は、施設・設備の老朽化対策が課題となるであろう。老朽化対策が、大学の活性化および研究支援に有効であるという観点から、大学としてのプロジェクトを通して予算要求していくことが必要である。青葉山 commons の新図書館が大学の活性化に有効であることを提示することで、他キャンパスの今後の道筋を示していけると考えられる。

ここで繰り返しになるかもしれないが、次の点を敢えて付け加える。外部評価としてこれまでの実績を中心に評価を加えた。何人かの委員が指摘しているように、東北大学附属図書館としては、我国の学術の将来に向けた取り組みを示すことが重要である。その一つが、オープンアクセス、オープンデータであり、その取り組みの中に、理系だけでなく人社系の貴重資料や最新の研究成果のデータを組み込んでいく動きを、ぜひとも構築していただきたい。

最後に、東北大学における学術の中心が附属図書館であることを、大学執行部が意識した運営をされることを期待したい。

外部評価委員会委員長
京都大学図書館機構長
引原 隆 士

2.2 外部評価書

凡例：

- ・各委員が、「自己点検・評価報告書」の事項に沿って評価し、評価報告書を作成。
- ・評価：特に優れているもの「A」、改善の必要があるものには「C」。それ以外は空欄。
- ・コメント：評価に関するコメントを自由記述。

(1) 引原 隆士 委員

自己点検・評価報告書の事項	評価	コメント
1. 学術情報整備の促進		
1.1 学習用学術情報資源（学生用図書等）の整備		
(1) 学生用図書の財源確保	A	財源確保も含めて、各図書館の実態を分析し、利用者に応じた整備を進めていることが高く評価される。一般書の充実に関しては、公立図書館との連携による充実の方針が出ており、今後の取り組みに期待したい。
(2) 学生用図書の選書		
(3) 学生選書の取り組み	A	
(4) 電子ブックの充実		
1.2 基盤的学術情報（電子ジャーナル等）と研究環境の整備		
(1) 電子ジャーナルの財源確保	A	EJ 予算の確保に努力されている。全学的基盤経費の増額を得て、分野を定めたインセンティブ経費とのバランスを部局長会議で決める方式は、現時点で適切であろう。今後部局館の外部資金の差などをどのように勘案していくかが課題であろう。
(2) 電子ジャーナルの選定	A	
(3) 蔵書目録データベースの整備		
(4) 教育・研究成果等の発信		
1.3 その他		
2. 学習環境の整備		
2.1 図書館施設・設備		
(1) 耐震補強、建物の老朽化への対応	A	施設整備を附属図書館、分館ともに適切にすすめている。分館によってはニーズとスペースのバランスに課題が見られる。附属図書館のラーニングコモنزの充実が際立つだけに、青葉山コモنزでどのような新たな展開ができるかが期待される。それが分館全体を含めた活性化につながり、ひいては全国の大学図書館への優れた例示となるであろう。
(2) 空調設備の改善、照明環境の適正化		
(3) 書庫の狭隘化への対応	A	
(4) 新たな学習スタイルへの対応、ラーニングコモنزの設置	A	
(5) サインシステムの統一		
(6) 身障者用設備の整備		
(7) ラーニングコモنزの展開	A	

2.2 図書館サービス機能		
(1) 開館時間延長のための経費確保		サービスの精神として利用者が使いたい時に使いたいだけ使うという考えは適切である。財源の問題はあるが、タイミングを見極めてダイナミックな運営も必要であろう。教育のタイミングを見極めた、リテラシー教育を運営していることは高く評価できる。
(2) 学部生の貸し出し冊数の増加	A	
(3) 書庫ガイダンスの実施		
(4) 開館時間のさらなる延長、無人開館	A	
(5) 障害者サービスの充実		
(6) 初年次学生向け科目への参画	A	
(7) 本館での情報リテラシー教育		
(8) 全学的な情報リテラシー教育の展開	A	
2.3 国際化対応		
(1) 留学生図書の実充、留学生窓口の設置	A	留学生支援、留学希望学生支援の取り組みが優れている。学部生に向けた取り組みは主には日本人学生に対するものと理解される。一方で、東北大学は旧帝大として大学院から留学してくる学生が多いことから、学部生とは異なる、リテラシー教育が必要である。特に、情報、研究導入、研究公正は、本館の業務とは異なる。それを全て本館で実施することは、大学院教育の実態との乖離がしょうじるのではないかという懸念がある。
(2) 英語多読教材の整備	A	
2.4 その他		
3. 社会・地域への知の還元		地域貢献に関する視点が、東北地域に限定されている面があるが、国文研PJや漱石文庫の展覧会などを利用したブランドアップが一層期待される。日本全体および世界的な知の保存と利用を意識して、オープンデータの方向性を、地域を率先して実現して頂きたい。
(1) 資料保存・修復の取り組み		
(2) 古典籍の電子化	A	
(3) 展示会・一般講座の充実		
(4) 大学ブランドPRへの貢献	A	
(5) 高大連携への貢献		
(6) 他の館種図書館とのコラボレーション	A	
(7) 震災ライブラリーの継続	A	
その他		

4. 組織・運営		財政基盤の確立はどの大学も難しい問題であり、早急に改善は無いであろう。しかし、EJ 経費の経費問題を当面クリアしていることから、積極的な取り組みが打てているように見受けられる。特筆すべきは体制の素晴らしさであろう。その中で、新図書館の運営、新しい取り組みに対してどのように体制を構築していくかが課題とも考えられる。
(1) 財政基盤の強化		
(2) 事務体制の見直し・最適化	A	
(3) 調査研究機能の再構築		
(4) 人材育成の充実	A	
(5) 防災対策の強化	A	
その他		

5. その他（自由記述）

非常にバランスが取れた取り組みがなされているという印象が強く残っている。評価に於ける質問にも丁寧に現場で回答頂き、スタッフの意欲の高さを実感した。それぞれの分館の課題は明確であり、それを大学全体としてどのようにまとめ上げて行かれるかは、評価者の大学の実情から鑑みても重要な示唆になる。このように、東北大学附属図書館の運営は一地域に留まるものではなく、東北大学のモデルとして全国を指導する立場にあり、今後も果敢に挑戦を続けて欲しい。

(2) 江川 和子 委員

自己点検・評価報告書の事項	評価	コメント
1. 学術情報整備の促進		
1.1 学習用学術情報資源（学生用図書等）の整備		
(1) 学生用図書の財源確保	A	電子資料の高騰の結果、学生用図書費へのしわ寄せが問題化している中、学生1人当たり1冊を目標とした財源を安定的に確保している点、本館だけでなく専門図書館の学生用図書の充実にも努めている点を高く評価できる。
(2) 学生用図書の選書		利用者アンケートによると、院生・学部生とも図書に関する期待度と実態評価のギャップが大きい。主たる原因が選書であるかどうかは即断できないが、さらなる分析と追跡調査を行ってほしい。
(3) 学生選書の取り組み		購入図書の展示にも工夫が凝らされており、学生の読書意欲・図書館運営への参画意欲を促すイベントとして効果をあげていると感じられた。
(4) 電子ブックの充実		
1.2 基盤的学術情報（電子ジャーナル等）と研究環境の整備		
(1) 電子ジャーナルの財源確保		どの大学においても抜本的な解決は困難な問題であるが、部局の負担割合の算出と調整に多大な労力をかけていた点を改善し、おおむね安定した状況にあることは評価できる。
(2) 電子ジャーナルの選定		
(3) 蔵書目録データベースの整備		着実に計画を遂行している。
(4) 教育・研究成果等の発信	C	機関リポジトリを通じた博士論文の公開は、学務担当との連携によって円滑に進められており、評価できる。一方、学術雑誌論文など研究業績の発信については不十分であると感じられる。日本を代表する研究大学として、オープンアクセス、オープンサイエンスの推進にも力を入れてほしい。
1.3 その他		
2. 学習環境の整備		
2.1 図書館施設・設備		
(1) 耐震補強、建物の老朽化への対応	C	一部の分館は施設の老朽化・陳腐化が感じられた。
(2) 空調設備の改善、照明環境の適正化		

(3) 書庫の狭隘化への対応	A	本館が今後 20 年あまりの新規図書受入に対応できること、新図書館に全学の共用書庫を設置予定であること等、長期的な展望に立って、優れた対応を実現している。
(4) 新たな学習スタイルへの対応、ラーニングコモンズの設置	A	本館 1 階のラーニングコモンズは、あらゆる来館者に対して新たな学習スタイルを可視化する場所として有効に機能している。当初から、学生の多様な学習ニーズを取り込む場所として細心に計画されており、さらに利用実態にあわせて改善に取り組んでいる点も評価できる。
(5) サインシステムの統一		
(6) 身障者用設備の整備		
(7) ラーニングコモンズの展開	C	一部の分館は新たな学習スタイルへの対応という点で不十分に感じられた。本館の先進的な取り組みを全学に拡大するためにも、施設の整備改修を大学に強く要求してもらいたい。
2.2 図書館サービス機能		
(1) 開館時間延長のための経費確保		現状の開館日・開館時間は国内の同規模の大学に比べて遜色のない体制である。
(2) 学部生の貸し出し冊数の増加	A	貸し出し冊数の増加傾向が続いているということは、蔵書が利用者の需要に適合していることの表れであり、評価できる。
(3) 書庫ガイダンスの実施	A	同様の取り組みは他大学でも行われているが、人文社会系の学生にとって実際に膨大な蔵書に接することは、知の体系を実感する重要な体験になるので、ぜひ積極的に推進してほしい。
(4) 開館時間のさらなる延長、無人開館		24 時間開館は常に一部の利用者から要望が上がるものだが、大学全体に現実的な需要があるかどうかは慎重に検討すべきものと思われる。
(5) 障害者サービスの充実		
(6) 初年次学生向け科目への参画		
(7) 本館での情報リテラシー教育	A	質・量ともに他大学の模範となるような優れた取り組みを行っている。特に情報検索技術の習得にとどまらず、論文・レポート作成支援を視野に入れた指導を実践してきたことは高く評価できる。
(8) 全学的な情報リテラシー教育の展開		

2.3 国際化対応		
(1) 留学生図書の充実、留学生窓口の設置		留学生用図書の整備とともに人的サポートを配置している点に先進性がある。日本人学生の外国語学習や留学支援など、大学のグローバル化を推進する拠点として、さらに多様な活用、サービス展開を期待する。
(2) 英語多読教材の整備	A	図書館の自主的な教材整備に始まり、教育・学生支援部からの予算措置を獲得したことは評価できる。
2.4 その他		
3. 社会・地域への知の還元		
(1) 資料保存・修復の取組み	A	経常予算の不足を補うため、助成金申請等を積極的に行うなど努力が認められる。
(2) 古典籍の電子化		
(3) 展示会・一般講座の充実	A	図書館の蔵書を活用し、大学内外で数多くの魅力的な展示会を開催している。これらは日常的な資料の保存・修復・調査研究等の取組みを前提としており、必要とする経費・労力も大きいですが、社会貢献の意義もたいへん大きい。
(4) 大学ブランドPRへの貢献	A	展示会やグッズ企画など社会貢献を意識した取組みだけでなく、ラーニングcommonsの運営、情報リテラシー教育の実施など、図書館の日常的な活動そのものが、大学のブランドPRに大きな貢献を果たしている。
(5) 高大連携への貢献	A	図書館員が地域の高校に出向き、情報検索の実習や英語多読法の講義を実施する取組みは、非常に興味深く感じた。高大連携を通じた地域貢献として評価できる。
(6) 他の館種図書館とのコラボレーション		
(7) 震災ライブラリーの継続		
その他		
4. 組織・運営		
(1) 財政基盤の強化		厳しい財政状況は多くの大学に共通している。大学本部へ予算要求を続けることと合わせて、地域・社会連携等を通じ、学外の資金やリソースを図書館に導入する取組みをさらに促進してもらいたい。

(2) 事務体制の見直し・最適化		分館・部局図書室体制は、各部局が自分の図書館に愛着と責任を持つという利点もあるが、高度な図書館サービスを全学に普及していくには、一元的な体制が望ましいのではないかと。
(3) 調査研究機能の再構築	A	図書館員と研究者の協働による調査研究体制を実現している。一時、脆弱化した調査研究機能を再構築したことは評価できる。
(4) 人材育成の充実	A	多くない定員の中で、能力と意欲のある職員を中心に、各種WG等の活動を通じてOJTで人材育成が図られている。
(5) 防災対策の強化	A	職員一人一人が高い防災意識を持ち、階段に蛍光シールを貼るなど、他大学に比べてきめ細かい対策が行われている。ぜひ震災の教訓を風化させず、受け継いで行ってほしい。
その他		

5. その他（自由記述）

想像していたよりも分館と本館に一体感があり、あるべき図書館サービスの理念を共有していることが感じられた。職員一人一人が現場で工夫をこらし、主体的にサービスの改善に取り組んでいる様子がうかがえた。

本館ラーニングcommonsの運営、情報リテラシー教育（学習支援）の実践には、あらためて参考になる点が非常に多かった。こうした先進的な取り組みを積極的に行い、学内外で高い評価と信頼を得ることが、次の予算措置や施設整備につながるという好循環を生んでいるように感じられた。

青葉山新キャンパスの新図書館は、まだ整備途上の段階での見学であったが、印象深いものであった。今後、学生の人気を集めることは間違いないが、本館のラーニングcommonsに加えて、この新図書館をどのように活用し、使い分けていくのか、期待をもって見守りたい。

(3) 市古 みどり 委員

自己点検・評価報告書の事項	評価	コメント
1. 学術情報整備の促進		
1.1 学習用学術情報資源（学生用図書等）の整備		
(1) 学生用図書の財源確保		<p>予算の確保について努力されていることがよくわかりました。慶應は学生用に非常に寛大な予算がついているので、（学対予算の比率など十分に比較していませんが）感覚的にもう少しあってもいいのでは、という気はしました。大学院生のニーズは報告書からは明確にわかりませんが、特に後期博士課程の学生は最も研究に集中できる人達であり時期であると思われるので、研究者とは別と位置付けるのであれば、大学院生のための財源は今後の課題かと思われました。</p>
(2) 学生用図書の選書		<p>選書の中心は教員でなく職員で十分かと思われます（経験的に）。これによるSDもありと思われます。委員会の中でサブジェクトライブラリアンが話題となりましたが、日本とは雇用や条件の違う米国での事例ですので、それを制度として持ってくるのは難しいと思います。バックグラウンドを持つ人（図書館員・教員）がいて、意見を聞ける体制を作っておくという考え方でよいのではないのでしょうか。</p>
(3) 学生選書の取り組み		<p>継続してください。今後、その他の学生主体の東北大らしい活動へつながることを期待したいです。多くの図書館が実施していますので、その効果を具体的に示す方法があればいいと思いますが、難しいですね。</p>
(4) 電子ブックの充実		<p>特に医学部の学習用にはあったら便利かと思われましたが（複本を積極的に購入されている実績がある）、商品と価格の問題があるので、将来のために何をどう選んで導入していくかといった戦略作りをまずしておけばよいと思います。</p>
1.2 基盤的学術情報（電子ジャーナル等）と研究環境の整備		

(1) 電子ジャーナルの財源確保	A	財源の確保については、大いに努力をされているだけでなく、結果が出ていると思われます。これから先、OAの進展や出版流通の変化を見据えた戦略作りを進めてゆけばさらによいと感じました。雑誌センター館の機能も備えているため、プリント版もかなり継続されている実態をみることができました。ある意味バッファーが確保されているとも理解できます。
(2) 電子ジャーナルの選定		選定は適切に行われていると思います。ただ、国からの目があるので、私立のようにザルな選定はできないのかもしれませんが、毎年の見直しやアンケート、入札、その後の接続確認、etCを考えると出版社、取次、図書館、利用者、あまりハッピーには思えません。むしろかかる人件費や作業へのモチベーションが気になります。
(3) 蔵書目録データベースの整備		目録は基本と思いますので、世界の研究に貢献するためにも古典籍や個人文庫のデータ整備を進めてください。
(4) 教育・研究成果等の発信		オープンアクセス方針は図書館と大学がうまく協力して進められることを期待します。研究者にとってのインセンティブがキーになると思います。
1.3 その他		
2. 学習環境の整備		
2.1 図書館施設・設備		
(1) 耐震補強、建物の老朽化への対応	A	耐震補強やラーニングコモンズの設置など計画的に整備が進んでいると思います。他の委員の皆さまは老朽化対策への対応が遅れているという意見が強かったですが、一度に進めることは難しいと思いますし、慶應と比較しても格段上にあるように思われました。（それだからいいという話ではないのでしょうか）
(2) 空調設備の改善、照明環境の適正化	C	改善を進めてください。
(3) 書庫の狭隘化への対応	A	本館地下や新図書館にも十分な書庫が準備されています。まだまだ余裕は見られますが、将来のために、重複資料の共同置場や場合によっては廃棄も視野に入れた検討をしておくといよいと思います。

(4) 新たな学習スタイルへの対応、ラーニングコモンズの設置	A	学生たちが利用しやすいよう、さまざまなタイプの学習場所が準備され、活用されています。シアトルカフェも魅力的です（価格は忘れませんでした）。将来の東北大学出身ノーベル賞受賞者がここで学習するかもしれませんね。（そしたら、寄付につながるかも）。学生がこの図書館で素晴らしい経験をできるようにしておくことは、学生の満足度を高めるので、よい循環につながると思います。ただ、地下の一人学習用は分館も含め、要求は高い割に、少し整備が遅れているように思われました。
(5) サインシステムの統一	A	よく検討されて作成されたと思います。分館にもそれぞれの事情に応じたサインの設置が行われていたことが分かりました。
(6) 身障者用設備の整備		コピー機、パソコン机、その他、今後も配慮された設備を進めてください。
(7) ラーニングコモンズの展開		新館のコモンズは楽しみです。その他分館のニーズを調査されて分野にマッチしたコモンズが展開できればよいと思います。
2.2 図書館サービス機能		
(1) 開館時間延長のための経費確保	A	現状の開館時間は努力の結果で十分と思います。調査をすれば必ず365日24時間という答えが必ず出てきますが、ニーズ、資源を考慮した適正な開館という姿があって当然だと思います。
(2) 学部生の貸し出し冊数の増加		増加させたいのであれば、制限をはずせばよいと思います。この意図は？
(3) 書庫ガイダンスの実施		研究の資源をみせれば、さらに研究意欲がわくと思いますので、続けてください。ただ、学生証を置くという管理は、少し心配（間違い・盗難など）になりました。
(4) 開館時間のさらなる延長、無人開館		分館でのカード管理が実現されているのはニーズに合った対応だと思います。海外と日本の環境とは違うので、日本の東北大学という判断で開館時間、無人開館の是非を決めて行けばよいと思います。
(5) 障害者サービスの充実		整備を続けてください。
(6) 初年次学生向け科目への参画	A	図書館としてかなり力を入れている取り組みであり、成功事例だと思います。継続的にこの取り組みに参画できるよう、人の育成、内容の修正を続けられればよいと思います。

(7) 本館での情報リテラシー教育	A	本館での知識経験が、分館にも生かされ、協力して人材が育てばさらに強みとなると思います。プログラムの開発、図書館員の知識と技術を生かせる範囲、初年次教育もそうですが、教員との協同が欠かせないと思いますので、いい関係が続くように、さらに担当者の熱意が損なわれないようにしていく必要もあると思います。
(8) 全学的な情報リテラシー教育の展開		分館と本館と共同で進められればよいと思います。
2.3 国際化対応		
(1) 留学生図書の実、留学生窓口の設置	A	グローバル学習室や留学生コンシェルジュの配置が、経費の獲得も含めてうまく機能していると思われます。
(2) 英語多読教材の整備	A	財源の確保により多くの資料が準備されていてそれが教育に活用されています。
2.4 その他		
3. 社会・地域への知の還元		
(1) 資料保存・修復の取組み	C	今後の可能性として、特に分館にあった貴重な資料の保存やデータ整備がなされていくことに期待します。また、閉庫にも多くの貴重な資料が平然と存在していたので保存お修復が適切になされるとよいと思います。期待をこめてCです。
(2) 古典籍の電子化		外部資金や学内の資金をうまく活用して、電子化を進めてください。東北大学から世界へ向けての研究支援となると思います。多くの貴重な資料を所蔵されているので、デジタル人文学への貢献も一つの柱になるのではないのでしょうか。
(3) 展示会・一般講座の実		委員会当日の展示は、資料の補修が外部からの支援を受けてなされており、それらが展示されていて興味深いものでした。広報の工夫や注記の内容が深められればなおよいと思います。
(4) 大学ブランドPRへの貢献	A	大学外での展示はよい企画だと思います。他の図書館の参考となると思いますので、ノウハウなどを公開されてはいかがでしょうか。
(5) 高大連携への貢献		地域の高校生が日常的に利用できる環境を提供しているばかりでなく、年間をとおして大学の一組織としての協力も十分なされていると思われます。

(6) 他の館種図書館とのコラボレーション		東北地方で最も力のある図書館であるので、研修はもちろんのこと、図書館業務や企画の協同などさらなる展開を期待したいと思います。
(7) 震災ライブラリーの継続		貴重な資料を網羅的に収集し保存し続けてください。資料によっては電子化を進めて、おくのもよいように思われました。サーバの維持管理など、長期的な保存に向けては、他の機関との協働が必要かもしれません。
その他		
4. 組織・運営		
(1) 財政基盤の強化	A	図書館長の力によって財政基盤は強化されているように思われました。しかし、施設、資料、人材、いずれについても十分という確保は厳しいので、戦略的に使い、図書館のさらなる発展を期待したいと思います。
(2) 事務体制の見直し・最適化		分館を含めて、業務改革の必要性、可能性を検討してください。おそらく分館があるので、業務の重複はあると思います。業務の展開とともに事務体制を変化させていく必要がでてくるので、いずれにしても、中期計画の実現のために最適化をして計画の実現を目指してください。
(3) 調査研究機能の再構築		調査をCDPAのサイクルに定期的に入れ込んで行ければよいと思います。
(4) 人材育成の充実		情報リテラシー教育のための人材育成は十分なされているようですが、例えば研究大学として期待されるであろう人材についての将来像がみえません。人材育成プログラムなどは存在しますか？人事交流・人事異動をうまく使って、人材育成がなされることに期待します。
(5) 防災対策の強化		暗闇でも通路がわかるようにテープが貼られるなど震災の経験が生かされた配慮がありました。日頃からの訓練も続けてください。
その他		

5. その他（自由記述）

- ・分館と本館との関係を懸念していましたが、各館がそれぞれ独自に改善に取り組んでいることがよくわかりました。
- ・組織が成熟してくると、いろいろなところにひずみが生まれて、スタッフの士気も下がってしまうことがよくあります。震災後の復旧活動、本館のリニューアル、新図書館のオープンなど次々に職員が考えなくてはならない課題が多いことは、大変ですが、組織に力がつき、活性化している状態だと思います。職員の熱意が継続するように、すべての職員が改革や改善に巻き込まれて問題意識を共有し、さらに発展されることを願っています。特に、新しい図書館のオープンを戦略的にどう活用していくか、これには多くの図書館が注目することになると思います。
- ・学習支援を中心に多くの改善がなされていると思います。研究についても、特に、分館は専門図書館とも位置づけられるので、今後は研究支援にもさらに注力されるとよいと思います。

(4) 呑海 沙織 委員

自己点検・評価報告書の事項	評価	コメント
1. 学術情報整備の促進		
1.1 学習用学術情報資源（学生用図書等）の整備		
(1) 学生用図書の財源確保	A	学生用図書整備事業を策定するなど、財源確保のための手立てが適切に行われています。
(2) 学生用図書の選書	A	図書館員が主導する本分館連携の選書システムが素晴らしいと思います。ただ、持続可能な仕組み作りに向けて改善の余地があるのではないのでしょうか。
(3) 学生選書の取り組み	A	単に「学生による選書」と位置付けるにとどまらず、学生の学生意欲を高め、図書館サービスへの参画を促すイベントとしてとらえているところについて高く評価することができます。
(4) 電子ブックの充実		
1.2 基盤的学術情報（電子ジャーナル等）と研究環境の整備		
(1) 電子ジャーナルの財源確保	A	図書館が策定した「学術情報整備計画」に基づき、大学共通経費からの措置を得るなど、適切に財源確保がなされています。
(2) 電子ジャーナルの選定		
(3) 蔵書目録データベースの整備	A	中長期的な見通しのもとに着実に遡及入力が進められており、高く評価できます。
(4) 教育・研究成果等の発信		
1.3 その他		
2. 学習環境の整備		
2.1 図書館施設・設備		
(1) 耐震補強、建物の老朽化への対応	C	四分館については耐震補強工事の必要性はないとのことですが、老朽化が進んでおり、早急に手立てを講じる必要があると思います。
(2) 空調設備の改善、照明環境の適正化	C	アンケート結果からも、特に四分館の空調設備の改善、照明環境の適正化が必要だと考えられます。学習／学修環境の改善という観点からも喫緊の課題です。
(3) 書庫の狭隘化への対応	A	集密書架の設置にとどまらず、共用書庫を設置するなど全学的な資料保存計画がなされており、高く評価できます。

(4) 新たな学習スタイルへの対応、ラーニングコモンズの設置	A	本館および工学分館のLCは活発に使われている様子をうかがうことができました。ただ、工学分館のLAnGuAge Studio はあまり利用されていないとのことなので、改善の余地があると思います。
(5) サインシステムの統一	C	全館を通して、ある程度の統一が望まれます。
(6) 身障者用設備の整備		
(7) ラーニングコモンズの展開	C	未着手の分館への展開が望まれます。
2.2 図書館サービス機能		
(1) 開館時間延長のための経費確保		
(2) 学部生の貸し出し冊数の増加	A	平成18年度以降、東日本や改修工事の影響を受けずに貸出冊数が上昇していることは高く評価できます。
(3) 書庫ガイダンスの実施	A	接架式閲覧に向けて適切な措置がなされています。
(4) 開館時間のさらなる延長、無人開館		
(5) 障害者サービスの充実		
(6) 初年次学生向け科目への参画	A	図書館主導のレポート作成法を教授する科目が、改善されながら12年間継続していることについて、高く評価できます。
(7) 本館での情報リテラシー教育		
(8) 全学的な情報リテラシー教育の展開	C	ニーズに基づいた全学的な協働体制の構築が望まれます。
2.3 国際化対応		
(1) 留学生図書の実質、留学生窓口の設置		
(2) 英語多読教材の整備		
2.4 その他		
3. 社会・地域への知の還元		
(1) 資料保存・修復の取組み		
(2) 古典籍の電子化	A	他機関と連携しながら貴重な資料の電子化が着々と進められていることを高く評価することができます。継続することが望まれます。
(3) 展示会・一般講座の充実	A	大学内にとどまらず、学外での展示会の実施を評価します。
(4) 大学ブランドPRへの貢献		
(5) 高大連携への貢献		

(6) 他の館種図書館とのコラボレーション		
(7) 震災ライブラリーの継続	A	今後も他機関と連携しながら、継続することが望まれます。
その他		
4. 組織・運営		
(1) 財政基盤の強化		
(2) 事務体制の見直し・最適化		
(3) 調査研究機能の再構築		
(4) 人材育成の充実		キャリアパスに基づいた人材育成など、更なる改善が望まれます。
(5) 防災対策の強化	A	適切に防災対策がなされているだけでなく、例えば北青葉山分館による夜間点検など、職員の防災意識の高さをうかがうことができました。
その他		

5. その他（自由記述）

下記、気づいたことを順不同にコメントさせていただきます。

人材育成

全館を通して、図書館の隅々にまで目配りがなされ、熱意をもって運営されている様子が伝わりました。

図書館にかかわらず、いかに優秀な人材を集め、育てるかが組織の成功につながると思います。今回案内してくださった職員のみなさんどなたからも図書館に対する真摯な姿勢を感じることができました。一方で、選書に必要な主題知識やスキルの獲得などに悩んでおられる姿も垣間見ることができました。

OJT と Off-JT と自己啓発のバランスをとり、メンタリングやポートフォリオを導入するなど、さらに改善することによって、他大学のモデルになるような人材育成モデルを構築でき得ると思います。

寄付

「何のために」「何を」「どのように」「得られるもの」などを簡潔に示した寄付のためのガイドを作成し、寄付を募られたらいかがでしょうか。

利用案内

- ・必ずしも統一する必要はないと思いますが、複数の図書館を使う利用者を想定し、記述項目などはある程度そろえた方がよいのではないのでしょうか。
- ・北青葉山分館の利用案内は、左側のページが日本語、右側のページが英語になっており、文字の大きさや配置が適切でみやすいと思います。内容も必要な項目がコンパクトに記述されています。
- ・パンフレットや利用案内等、色彩とコントラスト、文字の大きさ、フォントの種類、用語と表現など、ユニバーサルデザインを意識した作りにはいかがでしょうか。

東北大学附属図書館調査研究室年報

図書館職員の論文等発表の場となっていて素晴らしいです。継続していただきたいと思います。

東北大学附属図書館オリジナルグッズ

貴重な蔵書を有効に活用されていて素晴らしいです。種類も絵葉書だけでなく、ミニクリアファイル、一筆箋、ストラップ、アートシール、ボールペンなど多岐にわたっており、魅力的なラインナップになっていると思います。デザインも素敵です。ブランディングの観点からもぜひ、続けていただきたいと思います。

(5) 岡本 真 委員

自己点検・評価報告書の事項	評価	コメント
1. 学術情報整備の促進		
1.1 学習用学術情報資源（学生用図書等）の整備		
(1) 学生用図書の財源確保		厳しい財政状況につき、さらなる外部資金調達手法の開発を望みます（同窓会基金等）。また鳥取大学附属図書館と鳥取県立図書館の連携のような、宮城県図書館を動かす取り組みに期待します。
(2) 学生用図書の選書	A	早くからの取り組みであり定着してきている。継続は力を感じます。なお、館内での展示方法の工夫は特に評価したいと思います。
(3) 学生選書の取り組み		同上
(4) 電子ブックの充実		
1.2 基盤的学術情報（電子ジャーナル等）と研究環境の整備		
(1) 電子ジャーナルの財源確保		
(2) 電子ジャーナルの選定		
(3) 蔵書目録データベースの整備	A	本分野の先駆的な開拓者としての立場を一貫して維持していると評価します。学術情報流通の世界では必ずしもその理解が定着しているとは思いませんが、草創期段階からの革新的な取り組みを継続する気風の維持・発展を望みます。
(4) 教育・研究成果等の発信		
1.3 その他		
2. 学習環境の整備		
2.1 図書館施設・設備		
(1) 耐震補強、建物の老朽化への対応	A	東日本大震災以前から施設の機能性に配慮しながらも大胆な補修・補強工事を行い、学生らの命を守ったことを高く評価します。また震災経験を踏まえたその後の取り組みと情報発信は日本全国の大学の模範となっている点も高く評価します。
(2) 空調設備の改善、照明環境の適正化		
(3) 書庫の狭隘化への対応	A	2号館の思い切ったリニューアルにより、大学院生や研究者が貴重な人文・社会科学系の貴重資料にアクセスしやすくなった点は、大学図書館の基本を明確に実践しています。

(4) 新たな学習スタイルへの対応、ラーニングコモنزの設置	A	Aを大きく超える評価と考えます。限られた予算のなかで施設のあり方の思い切った見直しを図り、エントランスからの導線を含めて従来の大学図書館のイメージを一新した点はいままで以上に評価されてよい点です。
(5) サインシステムの統一		
(6) 身障者用設備の整備		
(7) ラーニングコモنزの展開	A	職員による各種講座展開はその内容の多彩さと常にその時代の環境を意識した一歩先を行くものとなっています。
2.2 図書館サービス機能		
(1) 開館時間延長のための経費確保		開館時間の拡大は重要なテーマですが、昨今公共図書館の世界にあるようなコストパフォーマンスを無視した精神論的かつ無制限な開館延長には慎重であることを望みます。特に24時間開館等は日本の地域社会の生活環境にはそぐわないものがあり、またすでに金沢大学の事例において一定の結論をみていることにじゅうぶんにご留意ください。
(2) 学部生の貸し出し冊数の増加		
(3) 書庫ガイダンスの実施		
(4) 開館時間のさらなる延長、無人開館		(1)に同じ。
(5) 障害者サービスの充実		
(6) 初年次学生向け科目への参画		
(7) 本館での情報リテラシー教育	A	形式的な内容にとどまらないIT・ウェブ系のリテラシー研修の導入を評価します。
(8) 全学的な情報リテラシー教育の展開		
2.3 国際化対応		
(1) 留学生図書 of 充実、留学生窓口の設置		
(2) 英語多読教材の整備	A	大学図書館のなかでは先行的な取り組みであることを評価します。
2.4 その他		
3. 社会・地域への知の還元		
(1) 資料保存・修復の取組み	A	外部資金を獲得しての資料整備を高く評価します。

(2) 古典籍の電子化	A	先行者として日本における資料電子化を牽引してきた点を評価します。
(3) 展示会・一般講座の充実	A	地域に開かれた展示会の開催を評価します。
(4) 大学ブランドPRへの貢献		
(5) 高大連携への貢献		
(6) 他の館種図書館とのコラボレーション		
(7) 震災ライブラリーの継続	A	ライブラリーの持続的な発展とともに、被災・復興体験を職員が発信し続けている点を評価します。
その他		
4. 組織・運営		
(1) 財政基盤の強化		
(2) 事務体制の見直し・最適化		
(3) 調査研究機能の再構築	C	重要な役割であり、特に東北地域における事実上のフラッグシップ館として制度的な取り組みを期待します。
(4) 人材育成の充実	A	公務以外においても職員各人が強い熱意をもって自己研鑽に取り組む姿勢を評価します。特に職員のなかには、大学図書館の世界にとどまらず、学校図書館や公共図書館等とのコミュニケーションを図り、広く豊かな知識と経験を自主的に培っている点は高く評価したいと思います。同時にこれらの職員の自己研鑽が機関・組織内において高く評価されることを望みます。
(5) 防災対策の強化	A	既述の通りですが、震災体験を継承し、日本全国の大学図書館の先導役を果たし続けるよう望みます。
その他		

5. その他（自由記述）

おおむね上述の通りであるが、常に東北大学附属図書館は東北地域における私学を含めた大学図書館の旗艦館であることを強く意識していただければと思います。そのためには、大学全体が置かれた厳しい経営環境のなかにあっても、財源をじゅうぶんに確保する必要があります。外部資金獲得を含む大学図書館側の努力を前提として、大学経営における執行部には大学図書館は大学にとって心臓であることを強く意識し、じゅうぶんな予算配分を行うことを望みます。

また、他の国立大学と比べても、京都大学や北海道大学に劣らない職員の自主的な「まなび」の気風を尊重し、かつ評価するよう望みます。経営的な観点・マネジメント的な観点からしても、業務としての研修にとどまらず、職員が自主的に自己研鑽に努めるという気風は容易に生み出せるものではありません。しかし、東北大学附属図書館にはそのような気風が存在しており、これはいかに私的活動とはいえ、大学図書館が意図的に生み出そうと思っても容易に実現できるものではないことをご理解いただきたく思います。これらの私的な自己研鑽活動が組織内において適切に理解される環境の整備を図書館の管理職層には強く要望します。

3. 参考資料：自己点検・評価報告書

3.1 自己点検・評価. 総括編（「自己点検・評価報告書」第1部より）

0. 自己点検・評価の枠組み

今回の報告書は、従来の自己点検・評価報告書および外部評価報告書の結果を踏まえて、その後の取組みと新たな課題を取り込んだ内容としている。

そして報告書の全体構成を決めるに際しては、従来作成してきた諸報告書の目次構成にとらわれることなく、現段階のこの図書館の活動のミッションおよび中期計画の枠組みで再構成することとした。それにより、今後、評価に基づく様々な行動計画（アクションプラン）の企画および実施に関して、図書館活動全体の把握とそれによる優先度の決定が可能になると判断したからである。

それではまず、この図書館のミッションと中期計画を示すこととしたい。

0. 1 附属図書館のミッションと中期計画

東北大学附属図書館という組織の基本的な理念・使命は、『東北大学グローバルビジョン』（2014年）中の次の部局ミッションに端的に示されている。

【部局のミッション（基本理念・使命）】

○附属図書館は、本学における学術情報流通の中核として情報基盤の重要な部分を担い、研究者・学生及び職員が必要とする情報資源の収集、創成、組織化、並びに提供を通じて本学における教育・研究活動を支援する。さらに、国内外並びに地域社会における学術研究の進展及び文化の振興に寄与する。

そして東北大学の第3期中期計画（平成28年度～）では、この部局ミッションの主旨から附属図書館の個別計画を次の5つの項目に整理しており、これが現時点での重点戦略・展開施策として位置づけられている。

1. 学術情報整備の促進

本学の学術情報（電子ジャーナル、データベース等）整備を継続的に実施するとともに、我が国の国公私立大学における学術情報の安定的・継続的確保と提供を目指す大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）と連携・協力しつつ、「ワールドクラスへの飛躍」に相応しい研究環境を整備する。

① 基盤的学術情報と研究環境の整備

- ・電子ジャーナル・データベースを中心として、世界30傑の研究活動を支えるのにふさわしい学術情報資源の水準の検討および整備。また、研究環境を安定的かつ十分なものにするための予算の確保
- ・所蔵資料の図書館目録データベースへの遡及入力 of 推進による研究活動に必要な資料へアクセスするための環境整備

② 学習用学術情報資源の整備

- ・学習用学術情報資源（学生用図書）の充実とそのための安定的かつ十分な予算の確保

2. 学術機関リポジトリによる教育・研究成果の発信

東北大学機関リポジトリ（TOUR）の整備・充実に図るとともに、電子的公開が義務付けられた学位論文について網羅的収集を実施する。

- ① 学術情報資源のオープンアクセス化に関する国内外の動向に呼应し、本学研究成果のオープンアクセス化をさらに推進
- ② オープンアクセスの進展に対応できる、本学機関リポジトリ（TOUR）システムの強化

3. 各図書館での学習環境の整備

附属図書館各館において、主体的な学びと知的交流に最適な場の整備を図る。

① 学習環境の場としての図書館整備

- ・新図書館（アカデミック・サイエンス・commons）の整備（運営組織含む）
- ・新図書館共同保存書庫の整備による蔵書および各分館スペースの有効利活用
- ・各館におけるアクティブ・ラーニング環境の整備（パソコン利用環境、グループ学習環境、イベントサポート等）

② 自律的学習のサポート

- ・全学教育科目「大学生のレポート作成入門ー情報探索から執筆までー」および授業外学習支援サービス「サポートデスク」の継続実施
- ・各種情報検索講習会やレポート作成講習会による情報リテラシー教育の継続実施

③ グローバル・ラーニングのサポート

- ・留学生コンシェルジュによる学修相談サービス、図書館利用案内、SNSなどのインターネットサービスを利用した広報
- ・授業と連携した語学学習資料の充実（例：英語多読授業）
- ・海外留学希望者のための留学情報資料の充実
- ・異文化コミュニケーション、ダイバーシティ、国際情勢理解のための資料の充実
- ・グローバル・ラーニング関連イベントの支援

④ 早朝・夜間開館の継続と、さらなる開館時間の延長および無人開館の実施と拡大

4. 社会・地域への知の還元

① 貴重書コレクションの保存と活用

- ・既存資料の調査による更なる貴重書・準貴重図書選定
- ・準貴重書庫等の資料の保存環境整備および資料修復の推進
- ・所蔵コレクションを用いた企画展・常設展の企画立案と実施
- ・資料案内小冊子などによる、貴重書等重要コレクションの学内外への周知
- ・古典資料の電子化と公開

② 東日本大震災記録の継承

- ・東日本大震災に関する資料収集と震災ライブラリーによる保存・公開活動の継続

5. その他

- ① 図書館全体（本館、分館、図書室）を包含した図書館組織・運営体制の最適化
 - ・職員の適切な人員配置および適切な運営組織体制の整備
 - ・図書館職員としての専門性を高める人材育成

0. 2 自己点検・評価の全体構成

本報告書では、上記中期計画に示した5つの重点戦略・展開施策の枠組みに従い、従来の自己点検・評価報告書および外部評価報告書で記述されていた【継続】項目と、それに新たに取扱うべき項目を加えて、自己点検・評価項目の全体を構成し直した。なお、中期計画中の機関リポジトリについては、全体構成のバランス上、「1. 学術情報整備の促進」に含めることとした。

それでは以下に、本報告書の全体構成を示すこととする。

1. 学術情報整備の促進

- 1. 1 学習用学術情報資源（学生用図書等）の整備
 - (1) 学生用図書の財源確保 【継続】
 - (2) 学生用図書の選書 【継続】
 - (3) 学生選書の取組み
 - (4) 電子ブックの充実
- 1. 2 基盤的学術情報（電子ジャーナル等）と研究環境の整備
 - (1) 電子ジャーナルの財源確保 【継続】
 - (2) 電子ジャーナルの選定
 - (3) 蔵書目録データベースの整備
 - (4) 教育・研究成果等の発信

2. 学習環境の整備

- 2. 1 図書館施設・設備
 - (1) 耐震補強、建物の老朽化への対応 【継続】
 - (2) 空調設備の改善、照明環境の適正化 【継続】
 - (3) 書庫の狭隘化への対応（特に蔵書の多い本館） 【継続】
 - (4) 新たな学習スタイルへの対応、ラーニングコモنزの設置 【継続】
 - (5) サインシステムの統一 【継続】
 - (6) 身障者用設備の整備
 - (7) ラーニングコモنزの展開
- 2. 2 図書館サービス機能
 - (1) 開館時間延長のための経費確保（特に本館の土日祝日） 【継続】
 - (2) 学部生の貸出冊数の増加 【継続】
 - (3) 書庫ガイダンスの実施

- (4) 開館時間の更なる延長、無人開館
- (5) 障害者サービスの充実
- (6) 初年次学生向け科目への参画
- (7) 本館での情報リテラシー教育
- (8) 全学的な情報リテラシー教育の展開

2. 3 国際化対応

- (1) 留学生図書の充実、留学生窓口の設置 【継続】
- (2) 英語多読教材の整備

3. 社会・地域への知の還元

- (1) 資料保存・修復の取組み
- (2) 古典籍の電子化
- (3) 展示会・一般講座の充実 【継続】
- (4) 大学ブランド PR への貢献
- (5) 高大連携への貢献
- (6) 他の館種図書館とのコラボレーション
- (7) 震災ライブラリーの継続

4. 組織・運営

- (1) 財政基盤の強化 【継続】
- (2) 事務体制の見直し・最適化 【継続】
- (3) 調査研究機能の再構築 【継続】
- (4) 人材育成の充実 【継続】
- (5) 防災対策の強化

1. 学術情報整備の促進

1. 1 学生用学術情報資源（学生用図書等）の整備

（1）学生用図書の財源確保 【継続】

学生用図書については、平成 21 年度に学生 1 人当たり 1 冊を目標とした「学生用図書整備事業」を策定し要求した。本部との折衝の結果、総長裁量経費による予算措置がなされ、平成 23 年度以降からは全学的基盤経費として毎年配分されている（平成 27 年度は 3,200 万円）。

この整備事業は、本部からの配分経費と各図書館の従来からの学生用図書経費を合わせて、①年間約 18,000 冊の整備、②新刊図書を中心とした基本的学習図書の継続購入、③全学問分野に対して偏りのない選定を実施する、という事業内容となっている。（平成 27 年度の全学での合計額は約 7,800 万円、購入冊数は約 17,000 冊）

措置された予算は本館・4 分館に配分し、各図書館にて選定作業を行っている。各図書館では、新刊図書や複本の購入はもちろんのこと、専門分野の参考書や電子ブックなど、特色のある選書を行っている。

アンケート結果では、全体的に学習・研究に十分な図書・雑誌に関してのギャップが大きい。とりわけ大学院生におけるギャップが目につく図書館もあり、学部生向けとともに資料の更なる充実策を講じる必要がある。

（2）学生用図書の選書 【継続】

前回の外部評価の指摘にあった、幅広い教員からの推薦による教養書の充実については、全学的な学生用図書予算の増加により、整備が進んでいると利用者アンケートからも評価できる。

また、図書館員が主導した本分館の連携による選書システムについては、先の学生用図書予算の分館への配分により各分野の図書整備が進んでいるものの、いまだ制度的な改善は未着手である。

今後は、全学的な視野に立った蔵書構築のシステム化方策を検討し、本分館の職員がそれぞれの得意分野の知見を活かした選書業務を実現することとしたい。

（3）学生選書の取組み

教員・図書館員による選定を補完するものとしての学生選書は、本館および複数の分館において実施している。本館では平成 21 年度から実施し、毎年約 20 名程度の参加、約 500 冊の書籍を購入している。

学生選書は、学生のニーズを取り入れるとともにその学習意欲を高め、図書館サービスへの参画を促すイベントとして、各館の特性や学生ニーズにあった形で今後も継続することが望ましい。

（4）電子ブックの充実

電子ブックの導入は、すでに平成 17 年度に工学分館でいち早く開始しており、その後、各図書館での購入により全学的な利用を進めている。しかしながら、利用できる件数は約 4,500 タイトルであり、学生の学習用教材として十分であるとは言いがたい。

今後は、他大学での導入および利用の動向もリサーチし、電子ブックの有効的利活用の方策を検討する必要がある。

1. 2 基盤的学術情報（電子ジャーナル等）と研究環境の整備

（1）電子ジャーナルの財源確保 【継続】

図書館として策定した「学術情報整備計画」（平成 18 年改訂）に基づき大学共通経費への予算要求を行った結果、部局による経費負担だけで全額を賄うという状況は改善され、平成 20～21 年度には総長裁量経費としての措置、平成 22 年度からは全学的基盤経費としての配分が行われている。当初 2 億円であった予算規模も、為替レート変動による価格上昇などの理由から増額を認められ、平成 27 年度には 3 億円を確保するまでとなった。

一方、部局経費負担に関しては、各部局の負担割合の算出と調整に多大の労力が費やされてきたが、現在は一定の割合（教員数と部局の予算規模）での合意がなされている。今後も大学内の予算配分方針を踏まえて、各部局の予算権限をもつ部局長レベルでの合意形成を行う必要がある。

（2）電子ジャーナルの選定

外国雑誌の高騰は今後も継続する課題であり、大学図書館コンソーシアム（JUSTICE）による契約交渉の下に、引き続き対策を考える必要がある。

基盤的学術情報環境を維持しつつ経費を抑制するという困難な課題となるが、購読内容を不断に見直し、購入の必要性を厳密に評価して、全体予算との兼ね合いから購入の可否を決定する選定システムを再構築しなくてはならない。

なお、アンケートで不満が多かった学外からの電子ジャーナル等へのアクセスについては、平成 28 年度に学術認証フェデレーション（世界標準の認証システム）を導入したことにより、東北大学 ID による認証・アクセスが容易に可能となっている。

（3）蔵書目録データベースの整備

図書館システムの電算化により、昭和 62 年から蔵書目録データベースの構築を開始するとともに、平成元年度からは学内予算措置により図書目録情報の遡及入力事業を開始している。現在は第 6 次計画（平成 20～29 年度）を実施しており、当初予定の 189 万冊の 8 割にあたる 147 万冊を登録し、利用の多い資料群については概ね入力を完了している。

今後は、古典籍や個人文庫・貴重書などの入力を進めるとともに、世界的な潮流であるところの資料そのものの電子化への計画転換を図っていく必要がある。

（4）教育・研究成果等の発信

平成 18 年度から運用している東北大学機関リポジトリ「TOUR」は、平成 25 年度学位取得者からの博士論文の収録についても、各研究科学務担当との連携により円滑に進めている。

今後は、内外の政策としてのオープンアクセス・オープンサイエンスの動向と歩調を合わせて、オープンアクセスポリシーの策定やリポジトリへの登録推奨を促進していく必要がある。

2. 学習環境の整備

2. 1 図書館施設・設備

施設・設備については各図書館の物理的状況に依存するものであり、全体を一概に論ずることはできない。ここでは、特に改善が望まれていた本館を中心として述べることにする。

(1) 耐震補強、建物の老朽化への対応 【継続】

耐震上問題のあった本館 1 号館では、大規模地震への対策として平成 20 年度に耐震補強工事を実施した。平成 23 年 3 月の東日本大震災発生時には、この耐震補強工事が有効に機能して、震災による建物の致命的な損傷を免れることができた。

老朽化への対応としては、平成 24～25 年度には本館の部分的な第 1 期改修工事、平成 25～26 年度には全面的な第 2 期改修工事を実施した。これにより、電気およびネットワーク配線の更新、上下水道設備の更新とともに、次から述べる空調設備の改善と照明環境の適正化、そしてラーニングcommonsの設置を実現することができた。また、2 階の学生閲覧室およびグローバル資料室（旧：研究閲覧室）、グローバル学習室（旧：事務用スペース）を改修した上で新規書架を導入し、開架閲覧室の環境向上も実現している。

なお、他の 4 分館については耐震補強工事の必要性はないが、それぞれ老朽化の対策が必要であり、概算要求および学内経費要求を継続しているところである。医学分館は全面改修の概算要求を行っており、農学分館は平成 28 年度中に新青葉山キャンパスの図書館への移転を予定している。

(2) 空調設備の改善、照明環境の適正化 【継続】

本館の第 1 期改修工事では、1 階自由閲覧室および事務室部分の個別空調化を実施した。また第 2 期改修工事では、エリア毎個別空調化とメインフロアおよび 2 階学生閲覧室部分の省エネ型熱源空調化を実施した。また、建物周りガラスの 2 重化・コーティングなどにより、室内環境の省エネ化・安定化を図っている。これにより、1 号館全館にわたる効率的空調運転と省エネ化が実現できた。

空調設備の改修とともに各エリアの照明設備においても、LED を多用した省エネ化と適正な照度確保を実現した。

なお、本館 2 号館の空調設備・照明環境の改善については、建物全体の改修工事を機に対応することとしたい。

アンケート結果では、全体的に照明・空調などに関するギャップがいまだ大きいですが、本館に関しては最も少なくなっている点は、改善効果の表れと評価したい。快適さと居心地のよさに関しても同様であることから、今後は、ギャップの大きい各分館の施設・設備の改善に注力する必要がある。

(3) 書庫の狭隘化への対応（特に蔵書の多い本館） 【継続】

本館の第 2 期改修工事と前後して、本館 1 号館地下書庫の収容能力増強のため、電動集密書架の導入工事を行った。地下書庫 1～2 階の北側エリアにはすでに集密書架を整備していたが、この工事により 1～2 階南側エリアも全面的に集密書架となった。地下書庫の収容能力は全体で約 190 万冊となり、向こう 20 年あまりの新規図書受入に対応できる状況に改善された。

また、今回の電動集密書架導入は、埋蔵文化財の保全地区である川内キャンパスへの増築が困

難であったことと、自動化書庫では書籍の背表紙が見えず教育環境としては相応しくないことから選択した狭隘化対策であった。

なお、新青葉山キャンパスの新図書館1階には、全学で利用できる共用書庫を設置予定である。ここは約50万冊の収容能力があり、各図書館で利用頻度の低い資料を収容することで、各図書館のスペース活用を促進する予定である。

(4) 新たな学習スタイルへの対応、ラーニングコモنزの設置 【継続】

本館の第1期改修工事ですでに、1階メインフロア部分にアクティブ・ラーニング・スペースを設置し、本学で初めてラーニングコモنز相当の機能を学内に実現した。このスペースには、グループ学習エリアとPCエリアを配置し、可動式の机椅子によるアクティブ・ラーニングおよびICT機器を活用した自主的学習を促進する場所として機能させている。

第2期改修工事では、2階南側エリアへのグローバル学習室（旧事務用エリアを改修）、1階メインフロア周りへのグループ学習室4室（倉庫などを改修）、エントランス付近への多目的室の設置を行い、それらもアクティブ・ラーニング・スペースとして十全に機能させている。メインフロアにはPCエリアのデスクトップ型PC75台に加えて、ノート型PC約40台を提供するセルフ貸出ロッカーを備えた。

また、第2期改修工事の終了後、平成27年4月にはエントランスに図書館カフェを設置し、民間企業による営業を開始している。

なお、工学分館では平成27年度に、アクティブ・ラーニング・スペースとしてグループ学習室と語学自習室を整備した。

アンケート結果によると、グループで学習・研究できるスペースやイベントなどで利用できるスペースへの期待値、講習会やイベントなどのアクティブな学び活動に関する期待値は低い。しかし、それらの施設・設備を備えて、アクティブな学びが活性化している本館に関する実態値評価が高いことは、実際利用してみた上でのニーズを反映したものと考えられる。また、本館における実際の利用状況からも、いまやアクティブ・ラーニング・スペースの有用性は否定できないであろう。

一方でアンケート結果からは、静かに学習・研究できるスペースの必要性和重要度が高いことが判明しており、より一層、それらのスペースを確保しておく必要がある。特に本館に関しては、静かな学習環境に関して相応の評価がある一方、座席数が少ないという不満が大きいことから、何らかの対策を講じる必要がある。

(5) サインシステムの統一 【継続】

本館の第2期改修工事の終了後、平成27年3月に本館1・2号館に新サインシステムを設置した。サインシステムの設計にあたっては、グローバル対応を前提とした日英表記を原則とし、ピクトサインを用いたユニバーサルデザインも意識したものとなっている（グローバルサインシステム）。

(6) 身障者用設備の整備 【継続】

本館第2期改修工事では、車椅子による図書館東側から図書館エントランスへのアプローチ、

エントランスから1階メインフロア部分への動線および2階各エリアへの動線に配慮した設計を行った。

(7) ラーニングコモنزの展開

ラーニングコモنز機能を持つ環境に関しては、本館での整備が一定の成果をあげて、利用者からの評価も高くなっている。

一方、分館での整備は、工学分館を除き未着手にとどまっており、利用者からの評価も低く、今後一層の整備促進が必要である。ただし青葉山新キャンパスに移転予定の農学分館に関しては、青葉山コモنزの中にラーニングコモنزを新設し（平成29年4月オープン）、この新キャンパス全体に対するラーニングコモنزの提供ポイントとして機能させる予定である

2. 2 図書館サービス機能

(1) 開館時間延長のための経費確保 【継続】

本館では、平成21年度から総長裁量経費の措置により、平日・土日祝日ともに22時までの開館を実現している。また、平日8時からの早朝開館も実施し、授業開始前（1講時は8:50開始）の図書館サービスを行っている。

全学の入館者数は、平成18年度以降は上昇傾向にあったが、東日本大震災および本館の改修工事の影響で平成23年度以降は減少に転じている。しかし、本館の改修が完了した平成27年度からは、以前の最高値にせまるペースに回復している。（資料編参照）

アンケート結果からは、開館日・開館時間への期待が高いことが判明したが、現状に対する大きな不満もないことから、まずは現在のサービス体制を維持することが求められよう。

(2) 学部生の貸出冊数の増加 【継続】

学生からの要望も踏まえて、本館における学部学生の館外貸出冊数を増加した（学生閲覧室の資料は5冊から10冊に、書庫の資料は5冊から25冊に）。

全学の貸出冊数は、平成18年度以降おおむね上昇しており、東日本大震災および本館の改修工事の影響は大きく受けずに、いまだ増加傾向にある。（資料編参照）

(3) 書庫ガイダンスの実施

利用資格が大学院生以上に定められていた本館地下書庫については、利用指導（書庫ガイダンス）を受講した学部学生も利用可とする運用を平成21年度から開始した。年間約300名の学部学生が書庫ガイダンスを受講している。約130万冊におよぶ地下書庫の資料に直に接することができるということは、学生の学習意欲と人文社会系情報リテラシー能力を高めるものであることから、今後も積極的に推奨する必要がある。

(4) 開館時間の更なる延長

本館は平日・休日ともに22時まで開館しているが、それ以降の延長開館や24時間開館に対しては少数ではあるが根強い要望がある。これは、分館の多くが夜間や休日におけるカード自動入退館が可能であることから、希望されているものでもある。

特に、仙台市営地下鉄東西線の開通（平成 27 年 12 月）で夜間の通学環境が変化したことにより、今後さらに要望が強くなることが予想されるため、本館の無人開館等の方策検討が必要となるろう。

（５）障害者サービスの充実

平成 28 年 4 月から施行した障害者差別解消法に対応して、各図書館での施設・設備面でのバリアフリーのみならず、視覚障害者の図書館資料のサービス面での整備等を、学内関連部署と連携を取りながら進めて行く必要がある。

（６）初年次学生向け科目への参画

平成 16 年度から初年次学生向け科目（後期セメスター）で、図書館主導により情報探索術とレポート作成法を教授する内容で開講した科目は、その後内容的な改善を続けて 12 年間継続してきた。年度を追うごとに履修生が減少傾向にあったが、前期セメスターに移動した平成 27 年度は、新入生のニーズに合致したためか一挙に増加して、100 名規模で授業を実施することとなった。

平成 28 年度からはこの科目の企画・運営に、高等教育分野の教員を迎えることにより、さらに適切な授業デザインとアクティブ・ラーニングの導入を図ることとしている。

今後は、初年次学生のアカデミックスキルを向上させるため、この科目の実施成果をもとにした教材や新たな科目を、全学教育担当の教員と連携して開発することが望まれる。

（７）本館での情報リテラシー教育

図書館で実施する新入生向けの情報リテラシー教育としては、図書館ガイダンスおよび情報探索講習会を実施している。平成 27 年度新学期の図書館ガイダンスは 27 回開催して参加者 639 名、うち留学生向けは 4 回 45 名となっている。また後期（10 月～）の留学生向けには、35 名参加している。

情報探索の講習会は、図書館で実施する公開型と、科目内容に応じて授業で実施するオーダーメイド型で実施している。情報探索関係の公開型講習会では、28 回開催して 439 名、レポート作成関係では 8 回開催して 35 名の参加であった。オーダーメイド型では 15 回開催して 241 名の参加であった。

（８）全学的な情報リテラシー教育の展開

本館以外では、医学分館での保健学科看護学専攻・医学科 3 年次全員向けの文献検索講習会や、金属材料研究所の所内文献探索ガイダンスなどの情報リテラシー教育に、図書館員が関わっている。他の分館でも新入生向けのガイダンスなど様々な取り組みを行っているが、今後は全学的な視野で図書系職員が共同して、情報リテラシー教育を企画・実施する体制が望まれる。

2. 3 国際化対応

（１）留学生図書の実、留学生窓口の設置 【継続】

留学生図書は、学内の留学生施策充実経費の補助により毎年度整備を進めているところである

が、平成 26 年度に新設したグローバル学習室に、語学学習書、留学関係資料、外国語雑誌などと同一エリアに配置することにより、認知度と利用度が向上した。

留学生の窓口に関しては、平成 24 年度から留学生コンシェルジュの配置を開始し、留学生による留学生のための案内・学習支援サービスを開始している。対応は多言語（英・日・留学生の母国語）となっているため、留学生はもとより日本人学生への学習支援ポイントとしても有効に機能している。

（2）英語多読教材の整備

全学教育の英語科目における多読法授業を支援するため、平成 21 年度から教材である英語多読リーダーズの整備充実を開始した。リーダーズの選定を授業担当教員と連携して行うとともに、多読教材の適切な配置・配架についても助言を仰ぎながら実施している。

図書館の自主的財源による継続的な教材整備と、科目授業における教育効果の実績が評価され、現在は教育・学生支援部からの新たな予算措置が行われるようになってきている。それにより、冊子のみならず電子ブックの購入や、英語のみならず他の諸言語の多読教材の導入を進めているところである。現在は 1 年次全体（約 1,800 名）の半数のクラス（約 900 名）が多読法を採用しているが、その授業数の増加に応じた整備方策の検討が必要である。

3. 社会・地域への地の還元

（1）資料保存・修復の取組み

国内でも有数の貴重書・古典籍を所蔵する本館は、多大の経費が必要となるその保存環境の整備および資料修復の取組みに苦慮しているところである。

東日本大震災を契機とした保存環境の改善対策として、平成 25 年度に狩野文庫と古典資料群を漏水の危険性のない本館 2 号館 4 階へと移動した。また、平成 26 年度には 1 号館の改修工事にあわせて 2 号館貴重書庫の改修を行い、セキュリティを高めて温湿度環境を一定にする空調も完備した。さらに今後は、空調施設が老朽化した 2 号館 1 階準貴重書庫の改修を行う必要がある。

資料の保存対策の一環としては、資料のレプリカ作成も進めており、展示借用の要望が多い国宝や漱石文庫等の貴重書レプリカを作成している。また、貴重書等の修復については、経常予算内での経費確保が困難であるため、平成 27 年度から公益財団等への助成金申請を積極的に行っている。

（2）古典籍の電子化

東北大学の古典籍電子化については、平成 15 年度から開始した和算資料の電子化がもっとも計画的で大規模なものであった。科研費により約 2 万点の和算関係資料を電子化したこの事業は、社会的な反響も大きく、平成 22 年度の日本数学会出版賞を受賞するなど高い評価を得ている。

現在、国文学資料館が中心となって実施している大規模プロジェクト「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」（平成 27 年度～）の拠点館として、さらに所蔵古典籍の電子化を進めることで、わが国における資料電子化の主導的役割を果たすこととしたい。

なお、狩野文庫についてはすでに丸善株式会社によるマイクロ化が完了していることから、その著作権等の適切な処理を通じて、電子化を進捗させることが求められる。

(3) 展示会・一般講座の充実 【継続】

平成 23 年以降の震災復旧工事および改修工事等が要因で、本館での展示会を実施できない期間があったものの（平成 24～25 年度）、豊富なコレクションを生かした本格的な展示会を毎年度開催している（展示会開催一覧を参照）。中でも以下の展示会は、大学キャンパス外の会場で実施し社会的な反響も大きかったものとして特記しておきたい。

- ・東北大学創立 100 周年記念展示「東北大学の至宝」（平成 19 年度：江戸東京博物館、仙台市博物館）、同記念展示「文豪 夏目漱石」（同年度：江戸東京博物館）
- ・海外特別展示「Natsume Soseki, the greatest novelist in modern Japan」（平成 25 年度：英国ロンドン大学、日本大使館）

なお、これらの資料展示のほかには本館内では常設展（第 19～60 回）42 回、特別展 10 回を実施しており、平成 24 年度からは学生サークル等の企画展示（合計 9 回）を受入れ始めたことも新たな試みである。

(4) 大学ブランド PR への貢献

先の東京や英国での展示会開催は、大学図書館の社会貢献活動として意義があるだけでなく、東北大学という大学ブランドの PR 活動としての意味も有する。また、展示会等にあわせた図書館オリジナルのグッズ企画も、大学の PR として有効である。東北大学ではすでに、狩野文庫・漱石文庫の素材を使った図書館オリジナルグッズを作成・販売しており、過去には夏目漱石をモチーフとした和菓子（羊羹）の企画実績もある（平成 19 年度）。

平成 28～29 年度に開催する夏目漱石展では、新たなオリジナルグッズの企画も計画されており、また平成 28 年度に開催予定の展示会（東京・大阪での「大妖怪展」）では、東北大学所蔵資料を使用したグッズの販売企画も進捗している。

今後も、多彩なコレクションを活用した展示会の開催やグッズ企画で、大学ブランドの認知向上に貢献することが求められる。

(5) 高大連携への貢献

全学的行事である 2 日間のオープンキャンパスでは、毎年約 5～6 千名の高校生が本館を訪れており、主に東北・北関東・北陸地区の高校生にとっては、国立総合大学の図書館を見聞する絶好の機会となっている。

近年では、本図書館での情報リテラシー教育の実績を評価され、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校などから、情報探索法の講義・実習を中心とした研修会を依頼される機会も多い。また、生徒の英語学習意欲を高めることを目的とした、英語多読学習法の講義を依頼されることも多く、英語科目担当教員の協力を得て図書館内で実施している。

(6) 他の館種図書館とのコラボレーション

近年、図書館界で最も集客力のある図書館総合展は、平成 22 年度から地域フォーラムの実施を開始して、全国各地域での各種図書館（大学図書館、公共図書館、学校図書館など）活動の活性化を図っている。仙台では東北大学を会場として、すでに平成 24 年 5 月と平成 28 年 3 月の 2 回

開催しており、他の館種図書館にも資するコラボレーション活動を先導している。

(7) 震災ライブラリーの継続

東日本大震災後、震災の記録を後世に伝えることを目的として関連資料の収集を開始し、平成24年3月に震災ライブラリーを本館に設置した。市販資料の購入にとどまらず、自治体・学協会等の各種関連機関からの寄贈も募り、現在も継続している。

また、被災各地の図書館での震災資料の収集活動を進捗させるために、平成23年度末から図書館共同キャンペーン「震災資料を図書館に」を開始し、東北地区の各図書館や神戸大学図書館とともに、活動意義の普及に努めている。

4. 組織・運営

(1) 財政基盤の強化 【継続】

学生用図書、電子ジャーナルなどに関する資料経費、開館時間の延長経費などの運営経費については、全学的基盤経費もしくは総長裁量経費等の臨時経費での措置や、各部局による経費負担方式などにより、安定的な経費を確保する必要がある。そのためには、それぞれの図書館事業に関する理解を得る必要があり、その実現に向けた努力が求められていた。

平成21年度からの学生用図書経費および電子ジャーナル経費、開館時間延長経費を総長裁量経費として獲得したことは、大きく評価できるものである（平成23年度からは、全学基盤経費として認められる）。

これらの経費は、各部局による一定の負担にも依存しており、中央経費と部局経費のマッチファンドによる運営という、大学全体の方針と軌を一にする方向性で、現在定着化しているところである。

(2) 事務体制の見直し・最適化 【継続】

当初計画されていた青葉山新キャンパスへの移転計画と、それに伴う附属図書館のいわゆる「3館構想」*は、経済情勢の悪化などで延期されるとともに、大幅な見直しをせざるをえなくなった。また、その後の概算要求により、急遽実現した新図書館計画の中では、3館構想に伴う抜本的な組織改編と事務体制の集中化を実施することはできなかった。

しかし、新図書館への大規模な共用スペース（電動集密書庫）設置が実現したことにより、全学的視点での図書館スペース再編成の可能性が高まったことから、今後の全学の図書館サービス及び事務体制を改めて見直す契機となることは間違いない。その見直しの中では、「本館」「分館」という区別的な名称に関しても、再度議論する必要がある。

※「3館構想」とは、現在の本館・4分館を、人文社会・教養系図書館（本館）、理系図書館、医学系図書館に再編する構想。現在の北青葉山分館、工学分館、農学分館（新図書館）は、組織的には理系図書館としてまとめ、3つの分館それぞれはサービス拠点として機能させる構想であった。

(3) 調査研究機能の再構築 【継続】

学術情報環境の変化や利用者行動の多様化に対応して業務の改善を図るために、教員と図書館

職員による調査研究機能の再構築が求められていた。

平成 21 年度から附属図書館に調査研究室を設置し、室長（副館長）のもと兼任の協力研究員 3 名を配置している。また、その活動を促進し普及するものとして、平成 24 年 3 月に同研究室年報の創刊号を刊行し、現在にいたっている（第 3 号まで刊行）。

（4）人材育成の充実 【継続】

良質の図書館サービスを維持するために、新規職員の採用と適切な人事選考、他大学との人事交流、そして国内外における研修受講や研修への参画により、一層の人材育成に努めることが求められていた。

図書系職員の採用に関しては、退職者・再雇用者・転出者の動向を踏まえつつ、本部人事担当と綿密な協議の上、毎年度少なくとも 1 名以上の計画的な採用を継続している。その際、現職の非常勤職員からの登用の道を開いていることは、他の国立大学には例をみないところである。他大学との人事交流にも努め、特に東北地区内での交流人事や転出等にも配慮しているところである。

研修への参加については、毎年度開催される図書系の研修には積極的な参加を促すとともに、国立大学図書館協会の海外派遣事業にも 2 件採択されている。

なおアンケート結果では、カウンターサービスや職員の対応などの職員評価（期待値・実態値ともに）が高いことから、いままでと同様に現場の職員育成に努めることとしたい。

（5）防災対策の強化

平成 23 年の東日本大震災を契機に、特に地震時の避難誘導等の実施方法の見直しを図ってきた。従来は年 1 回の開催であった避難訓練を年数回定期的に開催しつつ、防災対策の強化と避難誘導の改善を行ってきている。

現在もそれは継続しており、大規模地震に限らず、火災・水害等を想定した最適の防災・減災対策と被災時の対応方策について整備している。

3.2 「自己点検・評価報告書」に関する補足説明

1. 各部における記述の相違について

報告書各部の作成日が異なることにより、各部における固有名称等（「アカデミックサイエンスコモンズ」など）やイベント等実施（平成28年6月の国大図協総会の開催）に関する記述などに相違がある場合がありますので、ご容赦ください。

（1）作成日：平成27年度末時点（平成28年3月末）

- ・第2部 （全体）報告書
- ・第3部 利用者アンケート
- ・第4部 資料編

（2）作成日：平成28年9月時点

- ・第1部 総括編

2. 最新の状況について

第1部作成後から現在にいたるまでの最新の状況については、別紙「第1部 総括編補遺版」に取りまとめましたので、適宜ご参照ください。

別紙： 第1部 自己点検・評価. 総括編補遺版

1. 学術情報整備の促進

1. 2 基盤的学術情報（電子ジャーナル等）と研究環境の整備

(1) 電子ジャーナルの財源確保 【継続】

- 前年度比約1千5百万円増の予算措置（平成28年度）

平成28年度も、資料厳選等による経費節減努力にもかかわらず、引き続き電子ジャーナル総経費が上昇したが、全学的基盤経費の増額を受け対応することができた。平成28年度の全学基盤経費措置額は、約3億1569万円である。また、平成27年10月から実施された「国境を越えた役務の提供（海外サイトから提供の電子ジャーナル）に係る消費税」については、本部予算により対応している。

2. 学習環境の整備

2. 1 図書館施設・設備

(1) 耐震補強、建物の老朽化への対応 【継続】

- 北青葉山分館の老朽化への対応

北青葉山分館（1985年竣工）は築約35年の建物で、特に老朽化による空調装置とトイレ設備の不調が、利用者の不便や図書資料の汚損等を引き起こしている。その改善のため3年計画の全面改修の学内予算要求をしている。

2. 3 国際化対応

(1) 留学生図書の実充、留学生窓口の設置 【継続】

- 留学生コンシェルジュサービスの拡大（平成28年度）

平成24(2012)年12月から実施している留学生コンシェルジュの多言語サービスは、これまで主に本館利用者を対象に行ってきたが、ウェブカメラによるオンラインサービスを導入することにより、分館利用者にもサービスを拡大させる予定である。（学内留学生施策充実経費による）

3. 社会・地域への地の還元

(3) 展示会・一般講座の実充 【継続】

- 夏目漱石展示会の開催（平成28～29年度）

夏目漱石没後100年にあたる平成28年度および生誕150年にあたる平成29年度の2か年にわたり、「漱石文庫」による展示会を企画している。

平成28年10～11月に本館を会場に開催した展示会では、学内外から2,600名余りの来場者があった。また、10月22日に、姜尚中氏（東京大学名誉教授、熊本県立劇場館長）を講師に

迎え、「近代の憑依と漱石」と題して行った記念講演会では、一般市民を含めた約 200 名の参加があった。

(4) 大学ブランド PR への貢献

- 漱石羊羹の販売企画（平成 28～29 年度）

地元の老舗和菓子店である白松がモナカ本舗に、和菓子による「漱石文庫」PR の企画を提案し、漱石羊羹販売の共同企画が実現した。

- 漱石文庫ロゴマークの制定（平成 28 年度）

漱石文庫の認知度向上のため、平成 28 年度の漱石展開催でも協力いただいた漫画家の香日ゆら氏にロゴマークの制作を依頼し、平成 28 年 10 月に制定した。今後同文庫の PR に活用していく。

4. 組織・運営

(4) 人材育成の充実 【継続】

- PRRLA への加盟（平成 28 年度）

グローバルな視点をもった職員の人材育成機会の確保等の観点から、平成 28 年に Pacific Rim Research Libraries Alliance（環太平洋研究図書館連合,PRRLA）へ加盟した。平成 28 年 12 月にオーストラリア連邦メルボルンで開催された年次会議に出席し状況を確認するとともに環太平洋地区の図書館との交流を図った。また、館内の報告会において情報を共有した。

- 研究振興プログラムの開始（平成 28 年度）

附属図書館では、平成 28 年度から学内の図書系職員を対象に、図書館情報学及び図書館業務等に関する研究・調査・成果発表の振興を図るため、公募方式により研究に係る諸経費を 1 人 20 万円まで助成することとした。本プログラムは、科研費（奨励研究）等による研究助成金の自律的獲得と人材育成も目指す。

平成 28 年度東北大学附属図書館外部評価委員会報告書

平成 29 (2017) 年 3 月発行

編集・発行 東北大学附属図書館
〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1